

アドベンチャーキャンプに行ってきたよ!



▲参加したみんなで、「ハイ、チーズ！」

▲「ソーレ！」の声に合わせてみんなで協力したカッター体験



▲海で思いっきり泳ぎました



▲波の音が聞こえる海辺でキャンプファイヤー

8月8日(土)～11日(火)、福井県小浜市においてアドベンチャーキャンプが行われました。この事業は、日野町子ども会指導者連絡協議会が町内の小学校5・6年生を対象に毎年開催しているもので、今年は、57人の子どもたちが参加しました。子どもたちは、野外炊飯やキャンプファイヤーなどを体験し、カッター体験では、2キロも海へ漕いで出ることができました。たくさんの方たちとの新しい出会いもありました。普段味わうことのできないさまざまな体験と人とのつながりは、子どもたちの心を大きく動かし、温める機会となりました。

綿向雑感

日野町長 藤澤直広

穂りの秋が今年もやってきました。米価の低迷は気になるもののやはり収穫はうれしいものです。最近の収穫は4条刈りのコンバインを使えば1反(約1000㎡)1時間もかかりません。かつては、家族で一日がかりの仕事。殆どが手作業で、朝から鎌で稲を刈り、一把を藁すべで束ね、陽が差せば裏返し朝露で濡れた穂を乾かす。午後になり15把程度を1束にまとめ、肩に担いで稲穀場に運ぶ。いよいよ脱穀。小学生の高学年の頃、自動脱穀機の搬送チェーンに一把一把くわえさせるのが役割でした。当時は、圃場整備がされていなく、細い畦道を脱穀機やそれを動かす発動機を2人が担って運ぶ。脱穀した籾は一輪車で耕耘機で牽引する「トレーラー」へ。そして、夕暮れとともに家路につく。疲労感と埃と汗にまみれつつも満足感を味わうことができました。現在の米価は当時の倍程度、勤労者の賃金が10倍くらいになってい

ることからすれば低すぎます。それでも、労働の喜び、収穫の喜びはあります。5月に熊野の棚田で植えたキヌヒカリやモチの稲穂も頭をたれていきます。棚田ボランティアの人たちが収穫にやってきました。農業は大変な仕事だけれど人が生きていく上で大切な仕事。農作業は自然の恵みと労働の大切さに気づく大事な体験。「子ども農山漁村交流プロジェクト」はこうした体験を通じて子どもたちを豊かに育てようという取り組みです。7月に大阪の小学生167名を2泊3日、46軒の家庭で受け入れていただきました。これからドンドン広がっていきたいと思います。日野町には自然と共に生きる暮らしがある、人々が支えあう暮らしがある、そこ子どもたちが人と人との絆の大切さに気づき、自分の力を発見し体験を通じて健やかに育つ。そして、地域が元気になる。この国には都市も農村もあり人々が暮らし、それぞれが役割を果たしている。だから、都市も農村もそれぞれが大切にされる政治が求められている。それが実感できる社会を作らなければと思います。